

新潟大教育

五十嵐由利子

目的 高齢者の温熱環境の実態について、冬季暖房室での周囲気温が 30°C を越えるときもあったことを1989年度大会で報告した。しかしながら、その温度はストーブの輻射熱の影響のため、局部的に高温環境になっていると推測された。そこで、本研究では、暖房時に焦点をあて、室温も含め、高齢者の温熱環境を詳細に把握することを目的とする。

方法 新潟市内の高齢者の住宅2戸、高齢者2名を対象に、1989年11月に各々3日間実態測定を行った。測定項目は各室の室温及び外気温、高齢者の周囲気温と皮膚温（胸部・手部・足部）の測定、および感覚調査である。なお、各室の室温は3日間継続測定としたが、高齢者についての測定は8時から20時までとした。

結果 1) 居間で使用していた暖房器具はストーブと炬燵で、暖房中の室温は 18°C 前後であった。2) 高齢者の炬燵に入る位置はほぼ定位置で、その場所はストーブからも近い位置であった。従って、居間に在室しているときでも周囲気温の変動が大きく、室温との差が 10°C 以上になる時もありかなり見受けられた。これは、居間の中での移動および姿勢の変化のためと考えられる。3) 部屋の移動に伴う周囲気温の変動幅は $5\sim 10^{\circ}\text{C}$ で、外気温が更に低下する真冬では、この変動幅が大きくなることが推測される。4) 部屋の移動に伴う周囲気温の低下は、低下し続ける時間は2～4分程度であったが、各部皮膚温は周囲気温よりやや遅れて低下し始め、周囲気温が安定または上昇しても、なお低下し続けていることが多かった。また、周囲気温の変動幅が大きくなると、各部皮膚温の下降時間が長くなるという傾向がみられた。